

ドン・ファン・テノリオ(1)

登場人物(以下「」内は訳者の加筆)

ホセ・ソリーリヤ作 岡村 一 訳

ドン・ファン・テノリオ 「主人公。騎士」

ドン・ルイス・メヒーア 「同じく騎士でドン・ファンの友人。ドニャ・アナの許嫁」

ドン・ゴンサロ・デ・ウリオア 「ドン・ファンの許嫁ドニャ・イネースの父親。カラトラバ騎士団の代官」

ドン・デイエーゴ・テノリオ 「ドン・ファンの父親」

ドニャ・イネース・デ・ウリョーア 「ドン・ファンの許嫁でドン・ゴンサロの娘」

ドニャ・アナ・デ・パントハ 「ドン・ルイスの許嫁」

クリストファノ・ブッタレッリ 「セビーリヤの酒場の亭主。イタリア人」

マルコス・チウッティ 「ドン・ファンの下僕。イタリア人」

ブリヒタ 「ドニャ・イネースの守役」

パスクアル 「ドニャ・アナの屋敷の下僕」

セントリヤス大尉 「ドン・ファンの友人」

ドン・ラファエル・デ・アベリヤネダ 「セントリヤス大尉の友人」

ルシーア 「ドニヤ・アナの屋敷の召使い」

セビーリヤのカラトラバ修道会女子修道院の院長

同修道院の玄関番の修道女

ガストン 「ドン・ルイスの下僕」

ミゲール 「ブッタレッリの酒場の給仕。イタリア人」

彫師

警吏二人

給仕 (台詞なし)

ドン・ゴンサロの石像 (本人)

ドニヤ・イネースの亡霊 (本人)

セビーリヤの騎士たち、仮装した人々、やじ馬、骸骨、石像、天使、亡霊、警吏、町の人々

劇の舞台は皇帝カルロス五世の治世の末期、一五四五年ごろのセビーリヤ。
第一部は一夜の出来事。第二部はその五年後、やはり一夜の出来事。

第一部

第一幕

放蕩と醜聞

クリストファノ・ブッタレッリの酒場。正面奥に通りに面した戸口。テーブル、水差しのほか、こうした場所におなじみの器物類。

第一場

仮面を着けたドン・ファンがテーブルで手紙を書いている。ブッタレッリ、チウツティが並んで立って待っている。幕が上がると、仮装した人々、学生、松明を手にした人々、楽隊等々が奥の戸口の向こうを通り過ぎるのが見える。

ドン・ファン あのおくそつたれども、ぎゃあぎゃあ、ぎゃあぎゃあ！ 見てろ、手紙を書きおわつたら、わめきちらしたつけをたっぷり払わせてやるからな、ああ、きつとな！（書きつづける。）

ブッタレッリ（チウツティに）今日は楽しいカーニバルか。
チウツティ（ブッタレッリに）がっぽりもうかつて懐がふくれるな。

ブッタレッリ はっ！ きょうびセビーリヤはども不景気でしけた話ばかりさ。この店にもいいカモがかからない。それでなくてさえこんな店は、金持ちの旦那方に胡散臭い目で見られるし、どうかするとすぐいわれのな

い悪口いわれたりするんだからな。

チウツテイ だけど今日は……。

ブツタレツリ 今日だつて同じさ、チウツテイ。おまえ、いい小遣い稼ぎにありついたな。

チウツテイ しっ！ もうちよつと低い声で話せ。うちの旦那はいらつときやすいんだから。

ブツタレツリ 奉公してるのか？

チウツテイ もう一年になる。

ブツタレツリ で、どんな具合だ？

チウツテイ 文句なしだな。欲しいものなんでも……いやそれ以上に手にはいる。暇は多い、財布はばんばん、

いい女、いい酒。

ブツタレツリ そりゃあすごい！ いい奉公先にありついたな！

チウツテイ (ドン・ファンを指して) これがみんな他人様ひとに持っていただけるっていうんだからな。

ブツタレツリ 金があるんだな、おい？

チウツテイ うなってるよ。

ブツタレツリ 金離れは？

チウツテイ 学生並みさ。

ブツタレツリ で、高貴なお方なのか？

チウツテイ 王子様にもひけはとらないな。

ブツタレツリ 肝っ玉は？

チウツテイ 海賊も顔負け。

ブツタレツリ スペイン人か？

チウツテイ たぶんな。

ブツタレツリ 名前は？

チウツテイ それが今の今まで知らずじまいなんだ。

ブツタレツリ まぬけなこつたな。で、どこへいきなさるんだ？

チウツテイ ここへきなさつたんだ。

ブツタレツリ 長い手紙だなあ。

チウツテイ 書くのはお得意だからな。

ブツタレツリ それにしてもあんなに熱心に長々と、いつたいだれに書いてなさるんだ？

チウツテイ お父上様さ。

ブツタレツリ そりゃあ親孝行なこつた。

チウツテイ きょうび珍しい人だよ。あつ、しつ！

ドン・ファン (手紙の封をする。) 名前を書いて、折りたたんど。——チウツテイ。

チウツテイ はい。

ドン・ファン こいつをドニヤ・イネースが使う祈祷書に挟んで、手に渡るようにしてきてくれ。

チウツテイ お返事はいただいてまいりますか？

ドン・ファン スカートをはいた悪魔からな。お嬢様の守役で、こつちの腹を飲み込んでるご老女様だ。こいつから鍵を受け取つて時間と合図を決めるんだ。あとはここへ飛んで帰つてこい。

チウツテイ かしこまりました。(退場)

第二場

ドン・ファン、ブツタレツリ

ドン・ファン 「イタリヤ語」 クリストファノ、ヴィエニークア 「クリストファノ、こつちへこい」。

ブツタレツリ エッチェレンツァ 「はい、旦那様」。

ドン・ファン センティ 「ひとつ訊きたいんだが」。

ブツタレツリ セント。マ オ インパラト イル カスティリアノ。セ エ ピウ ファチレ アル シニョ
ル ラ スア リングア…… 「なんでございましょう？ ですがスペイン語は覚ええました。もしもご自分の言葉

のほうがお楽であれば……」。

ドン・ファン そうだな。そつちのほうがいい。ラシア ドウンクエ イル トウオ トスカノ 「じゃあイタリ
ア語はやめよう」。なあ、今日ドン・ルイス・メヒアはきたか？

ブツタレツリ それが、まだセビーリヤへお戻りじゃないんで。

ドン・ファン ほんとにまだ戻ってないのか？

ブツタレツリ と存じますが。

ドン・ファン じゃあ、なにか聞いてないか？

ブツタレツリ そうだ！ 今ひとつ思い出しました。ご参考になるかと……。

ドン・ファン なにか手がかりになる話か？

ブツタレツリ かと存じますが。

ドン・ファン じゃあ聞かせてもらおう。

ブツタレツリ 「傍白」 そうだ、まちがいない。今晚でまる一年になる。忘れてた。

ドン・ファン さあ！ 早く教えろ。

ブッタレツリ 申し訳ございません、旦那様。思い出しておりました。

ドン・ファン さあ、早く！ いらいらさせるな。

ブッタレツリ えー旦那様、こういう話でございます。旦那様がお尋ねになったメヒア様が、あるときとんでもないことを思いつかれました。いくらあの方でもこれ以上ないような、それはもう悪い考えで。

ドン・ファン よけいな前置きはいい。それなら承知してる。ルイス・メヒアとファン・テノリオが賭けをしたんだらう、一年でどつちがうまく悪さをしてのけられるかとな？

ブッタレツリ ことのしだいはご存じで？

ドン・ファン 細大漏らさずな。だからメヒアのことを訊いたんだ。

ブッタレツリ いやあ、お約束が果たされればとは存じますが、なにしろお二人からはお宝をたつぷり頂戴できませんで。

ドン・ファン おまえはドン・ルイスが今日の約束にくるかどうか怪しいと？

ブッタレツリ まさか、おいでになるはずが！ もうそろそろ時間ですし、そのまえにあんな馬鹿なことを覚えてるお人があるとは、とても思えません。

ドン・ファン よし、わかった。とつておけ。

ブッタレツリ これはおそれります！ (最敬礼する。) お二人のどちらかを(ご存じで？)

ドン・ファン かもな。

ブッタレツリ じゃあ、おいでになるでございませうか？

ドン・ファン 一人は確実だな。だがひよつとして二人、相前後してここへ向かっているかもしれない。だから店でいちばん上等な酒を用意しておいてやってくれ。

ブッタレツリ ですが……。

ドン・ファン いいから。おれはちよつと出てくる。

第三場

ブッタレッリ

いやいやこれは！ きつともうメヒアもテノリオも帰つてきてるな……で、ちゃんと約束を果たすつてわけだ。うん、そうにちがいない！ 今の旦那はなにもかも知つてる様子だった。(外で物音)なんだ、いつたい。(戸口から見る)こりやあまた！ あの一見さんの旦那、広場で喧嘩してるじゃないか！ いやいや、なんて騒ぎだ！ ごろつきどもがあんなに大勢集まつて……！ 旦那ひとりにあんなに尻込みして……！ あーあ、なんて騒ぎだ！ あいつら尻尾巻いて逃げだしたぞ！ そうか、そうだな。あの二人、国へ帰つてきてる。こりやあせピーリヤじゅう大騒動になるぞ。ミゲール！

第四場

ブッタレリ、ミゲール

ミゲール (イタリア語―訳者注) ケ コマンダ 「ご用で」？

ブッタレッリ プレスト。クイ セルヴィ ウナ タヴオラ、アミコ。エ デル ラクリマ ピウ アンティコ
ポルタ ドウエ ブッティリエ 「急いでここにテーブルを置いて、いちばん古いラクリマクリステイを二本持つてきてくれ」。

ミゲール シ、シニョル、パドロン「はい、旦那様」。
ブッタレッリ ミケレット、アツパレキア イン カリタ ロ ピウ リッコ ケ シ ファ。アフレッタテイ
「ミゲール、とにかくとびきり上等のやつ頼む。大至急だ！」
ミゲール ジア ミ アフレット、シニョル パドロネ「はい、ただいま、旦那様」。(退場)

第五場

ブッタレッリ、ドン・ゴンサロ

ドン・ゴンサロ ここだな。——おい。

ブッタレッリ いらつしゃいますし。

ドン・ゴンサロ 亭主と話したいんだが。

ブッタレッリ はい、わたくしでございますが、なにか？

ドン・ゴンサロ おまえか。

ブッタレッリ はい。ですが手早お願ひいたします。なにせ忙しくしておりますんで。

ドン・ゴンサロ ならばこの金貨、ちゃんとしたやつで通用するものかどうか確かめてみる。どうだ？

ブッタレッリ いや、これはこれは！

ドン・ゴンサロ ドン・ファン・テノリオを知っておるか？

ブッタレッリ 存じあげております。

ドン・ゴンサロ ここで人と会う約束になっておるそうだが、まちがないか？

ブッタレッリ ああ、旦那様はお相手の方で？

ドン・ゴンサロ だれのことだ？

ブツタレツリ ドン・ルイス様で。

ドン・ゴンサロ いや、そうではないが二人が会うところに立ち会いたいと思つてな。

ブツタレツリ お二人にはこちらのテーブルの席をご用意してございます。わたくしがお二人に夕食をお出しいたしますが、その別のテーブルの席にお座りになれば、様子をごらんになれますかと……。いや、きつとこれは見ものでございますよ。

ドン・ゴンサロ だろうな。

ブツタレツリ あの若いお二人は、文句なしにスペインきつてのお勇ましさでございますからねえ。

ドン・ゴンサロ ああ、そしてあんな下劣な連中もおらん。

ブツタレツリ ご冗談を！ 近ごろの悪事はどれもお二人のしわざにされておりませんが、口さがない連中はなんとでも申しますので。だつて、テノリオ様とメヒーア様ぐらい金払いのいいお方はないんですよ。

ドン・ゴンサロ はっ！

ブツタレツリ 人は悪い噂が好物という話で。なにせ旦那様、あれぐらいちゃんとお支払いくださる方は、ほかにいらっしやいません、ええもうほんとの話。

ドン・ゴンサロ もうわかつた。ところで……。

ブツタレツリ なにか？

ドン・ゴンサロ 隠れて様子を見られるとありがたいんだが、だれにも気づかれんようにしてな。

ブツタレツリ いやもう、それはなんでもないことでございます、旦那様。カーニバルとなれば、どんなに身分の高いお方であれ仮面を着けても家の恥にはなりませんし、だいいち仮面を着けていれば、とらなにかぎりだれとはわかりませんので。

ドン・ゴンサロ 隣の部屋のほうがいいように思うが……。

ブッタレツリ それが、あいにくございませんので。
ドン・ゴンサロ ならばしかたがない。仮面を貸してくれ。
ブッタレツリ ただいま。

第六場

ドン・ゴンサロ

世の中にこんな男があるとは、どうにも納得がいかん。相手に理不尽なことはしたくない。ほんとうのところをこの目で確かめてみるとな。で、ひよつとしてあの賭けの話が事実なら、あれを嫁になどやれん。それぐらいならいつそ死んでくれたほうがましだ。娘を辱められては生きている意味がない。だが、まずはよき父親であろう。ひとかどの騎士としてのふるまひはそのあとだ。これは願ってもない良縁にはちがいないが、テノリオに花嫁衣裳を死に装束に変えられてはたまらん。

第七場

ドン・ゴンサロ、ブッタレツリ（仮面を持ってくる）

ブッタレツリ どうぞ。

ドン・ゴンサロ すまんな、亭主。二人がくるまでまた、たいぶ時間がかかるかな？

ブッタレツリ お見えになるのであれば、もうおっつけ。じき八時になりますので。

ドン・ゴンサロ それが約束の時間か？

ブッタレツリ その時間までにということになっております。鐘が鳴りだすの間に間に合わなければ、勝負は負けという取り決めで。

ドン・ゴンサロ 世間の噂どおりでなく、ただの冗談であってくれればいいが。

ブッタレツリ わたくしもほんとうに約束どおりになさるか、まだ半信半疑なんでございます。でも実際どうかそんなにお知りになりなければ、そろそろ刻限、もうまもなく……。

ドン・ゴンサロ だったら仮面を着けて座っておかねばな。(右側のテーブルの席に座り、仮面を着ける。)

ブッタレツリ 「傍白」わからないなあ。この爺さん、いったいなんなんだ。どこのだれかわからないことにはどうにも落ち着かない。(掃除するなどしてせつせと働きながら、横目でちらちら客を見る。)

ドン・ゴンサロ 「傍白」わしのような者がこうした場所で待たされ、あまんじてこんな役まわりを務めねばならんとはな！ それもこれも伊達や酔狂でなく、つまりはわが家の平安と無垢なひとり娘の幸せを願えばこそだ。

第八場

ドン・ゴンサロ、ブッタレツリ、ドン・ディエーゴ(奥の戸口に登場)

ドン・ディエーゴ 聞いたとおりの感じた。この店にまちがない。うまく教えてもらったな。よし、着いた。

ブッタレツリ また仮面の客か？

ドン・ディエーゴ ああ、この店の者だな。

ブッタレツリ いらっしやいまし。

ドン・ディエーゴ 月桂樹亭だな？

ブツタレッツリ はい、さようでございます。

ドン・ディエーゴ 亭主はおるか？

ブツタレッツリ わたくしで。

ドン・ディエーゴ おまえがブツタレッツリか？

ブツタレッツリ はい。

ドン・ディエーゴ ここで今日テノリオが人と待ち合わせておるそうだが、まちがないか？

ブツタレッツリ まちがいございません。

ドン・ディエーゴ で、もうきておるか？

ブツタレッツリ いえ、まだ。

ドン・ディエーゴ だが、くるんだろうな？

ブツタレッツリ さあ、わたくしにはなんとも。

ドン・ディエーゴ 待つてはおるんだな？

ブツタレッツリ はい。ひよつとしてお見えになるかと。

ドン・ディエーゴ ならばわしも待たせてもらおう。(ドン・ゴンサロの反対側の席に座る。)

ブツタレッツリ お待ちになるあいだ、なにか摘まむものでも？

ドン・ディエーゴ いらん。これをとつておけ。(金を渡す。)

ブツタレッツリ これはおそれいます！

ドン・ディエーゴ よけいな口は利かんでいいぞ。

ブツタレッツリ 申しわけございません。

ドン・ディエーゴ よし。では、かまうな。

ブツタレッツリ 「傍白」いやいや！ おそろしく機嫌が悪いな。

ドン・ディエーゴ「傍白」わしのような家柄の者が、こんな下賤な場所へ足を運ばねばならんとはな。だがこと息子となると、いかなる恥も忍ぶのが父親。この目で事実を、おのれで生み出した色欲の化け物のありようを確かめたい。

ブッタレッリ (奥でものをかたづけながら、仮面を着けて無言でいるドン・ゴンサロとドン・ディエーゴを見て) こりゃまるで対の石像だな！ 御用はなさそうだ。でも結構じゃないか。飲み食いせず代金だけくれる。で、こっちはまるもうけつてわけだ。

第九場

ブッタレッリ、ドン・ゴンサロ、ドン・ディエーゴ、センチリヤス大尉、騎士二人、アベリヤネダ

アベリヤネダ ぞれぞろ集まってくるぞ。いよいよ鉄火場のご開帳だ。

センチリヤス じゃあ店へはいつていよう。——ブッタレッリ！

ブッタレッリ これはセンチリヤス大尉様。おひさしぶりで。

センチリヤス そうだな、クリストファノ。おれがいないんじや、このあたりで世の語り草になる豪遊なんてなかつたらう？

ブッタレッリ なにせずっかりお見限りでございましたからねえ。

センチリヤス 皇帝陛下の遠征でチュニジアへいつてたんだ。で、事情があつてセビーリヤへ舞い戻ってきた。

聞いた話じゃ、旧交を温めるにはこれ以上ないときに帰ってきたらしいな。じゃあ、とりあえず酒を二、三本持つてきてくれ。それをひっかけながら、言い争いのもとになった一件、ひとつ実際のところを聞かせてもらおう

じゃないか。

ブツタレツリ　かしこまりました。けど、そのまえに酒蔵へいかせてくださいませ。

人物たち　それ、それ。

第十場

ブツタレツリを除く前の場の人物たち

センテリヤス　座ろうか、みんな。アベリヤネダにドン・ルイスの話の続きを聞かせてもらおう。

アベリヤネダ　あとはもうたいした話じゃない。おれにいわせりゃ悪事の武勇伝でテノリオのほうが上だなんて、そんなことあるわけがない。だからドン・ルイスに賭けるってことだ。

センテリヤス　たぶんきみの負けだぞ。ドン・ファン・テノリオといえは、有名な話、こんな手に負えない男はない。だれにだつて遊び半分で勝ちまう。で、本気を出せばどれだけすごいかってことだ。

アベリヤネダ　だつたらおれはメヒアの武勇伝をよく知ってる。いやもうすごいなんの、黙ってあの男に賭けて損はないよ。

センテリヤス　じゃあ、センテリヤス大尉はあり金残らずドン・ファン・テノリオに賭けよう。

アベリヤネダ　よし、おれは親友のドン・ルイスにすることで受けて立とう。

センテリヤス　テノリオの向こうを張ろうなんて、じつに無謀きわまりないな。なにしろあの男みたいなのはこの世に二人とないんだから。あれはだれもが知る幸運児。そしてやることなすこと桁外れときてる。

第十一場

前の場の人々、ブツタレッリ(葡萄酒の瓶を持ってくる。)

ブツタレッリ ファレルノ、ブルゴーニユ、ソレントをお持ちしました。

センテリヤス おまえがいいと思うのでかまわないからついでくれ、クリストファノ。ところでドン・ファン・テノリオとドン・ルイス・メヒアが一年前に賭けをしたそうだが、実際、どんな様子だったんだ？

ブツタレッリ はい。十分ご満足いただけるほど詳しくは存じませんが、わたくしの知るかぎりです。よろしければ、人々 聞かせろ、聞かせろ。

ブツタレッリ では、ありのままを。お二人、賭けはほかならぬわたくしの店でなさったんですが、なにぶん期限は遙か先。とても成り立ちっこないと、てつきりそう踏んでおりました。だもんで、このことはついさつきまで、思い出しもしなかつたんでございます。ところが今日の夕方、もうおつつけ暗くなるうかという時刻でしたか、ひとりの旦那様が店へはいってみえて、手紙を書きたいからペンと紙を貸せと。で、いっしんに書きはじめられ、そのあいだにわたくしはお連れの従者と言葉を交わしました。この男はわたくしと同郷でジェノヴァの者。ところがこれが、いやもうじつにすっかりしたやつで、なにも聞き出せません。で、ご主人様は手紙を書きおえるとその男に持たせて、先方へ届けるようにと。それからわたくしの故郷の言葉でこちらに話しかけられ、ドン・ルイス様の消息をお尋ねになりました。そして二人のあいだのいきさつは残らず承知している、少なくとも一人はまちがいに勝負にくると。わたくしはこの旦那様についてもっと知りたかつたんでございますが、その前に金貨を二枚握らせ、ひよつとして両方とも約束の時間にくるかもしれないから、二人のため店一番の酒を二本用意しておくと。なんだかとおぼけておいでのようにもお見受けしましたが。あとはもうなにもいわず店をお出になりました。とにかくお代は頂戴しましたので、賭けをなさったときと同じ場所に席をお作りしました、

そら、あそこ、椅子を二脚、盃を二つ、お酒を二本ご用意して。

アペリヤネダ だったら、おい、まちがいない。ドン・ルイスだ。

センテリヤス いや、ドン・ファンだろう。

アペリヤネダ 顔は見なかったのか？

ブツタレツリ それが仮面を着けて顔を隠しておいででしたもので。

センテリヤス それにしても、なあ、二人の風体は覚えていなかったのか？ 顔のほかにもなにかの特徴で人の

区別はつきそうなものだが。

ブツタレツリ 正直、ぼんくらなことで見分けがつきませんでした、なんとかさうしようとはしたんでございま

すが。けど、お静かに。

アペリヤネダ どうした？

ブツタレツリ 鐘が鳴りだしました。八時十五分前。(鐘の音)

センテリヤス おい、見ろ、ぞろぞろはいってきたぞ。

アペリヤネダ セビーリヤじゅうがこの勝負に興味しんしんだからな。

(八時の鐘が聞こえる。数人はいつてきて無言で舞台に散らばる。最後の鐘が鳴ると仮面を着けたドン・ファンが登場し、ブツタレツリが舞台中央に用意したテーブルへ歩み寄って、その前に置かれた二脚の椅子の一方にかける。ドン・ファンにつづいて、やはり仮面を着けたドン・ルイスが登場し、もうひとつの椅子へ。全員が二人を注視。)

第十二場

ドン・ディエーゴ、ドン・ゴンサロ、ドン・ファン、ドン・ルイス、ブッタレツリ、
センテリヤス、アベリヤネダ、騎士たち、やじ馬、仮面の人々

アベリヤネダ (ドン・ファンを指してセンテリヤスに) もし二人がくるとしたら、あれはそのうちの一人だな。
うまく正体を隠すもんだ。

センテリヤス (ドン・ルイスを指してアベリヤネダに) で、もう一人はもうひとつの椅子へと。こりゃあ、おお
ことになるぞ！

ドン・ファン (ドン・ルイスに) 申し訳ないが、その席は予約してあるんですがね。

ドン・ルイス (ドン・ファンに) いや、それはこっちの台詞。その席はわたしの友人のためとつてある。

ドン・ファン そこはわたしが予約した。いまにおわかりいただける。

ドン・ルイス わたしも同じ。そこはわたしが予約した。

ドン・ファン じゃあきみはドン・ルイス・メヒーア。

ドン・ルイス ならばきみはドン・ファン・テノリオ。

ドン・ファン かもしれない。

ドン・ルイス 言葉だけでは……。

ドン・ファン 信用できないと？

ドン・ルイス ああ。

ドン・ファン それはこっちも同じ。

ドン・ルイス だったらお化けごっこはもうやめよう。

ドン・ファン (仮面をとりながら) おれはドン・ファン。

ドン・ルイス (同様にして) おれはドン・ルイス。

(双方、仮面をとって椅子に座る。センチリヤス大尉、アベリヤネダ、ブッタレッリほか数人が二人へ歩み寄って挨拶、抱擁、握手そのほかこれに類する親愛の情や友情をあらわすしぐさ。ドン・ファンとドン・ルイスはそれに丁重に応じる。)

センチリヤス ドン・ファン!

アベリヤネダ ドン・ルイス!

ドン・ファン お歴々!

ドン・ルイス おお、みんな! これはどうした僥倖だ?

アベリヤネダ 二人の勝負の話を聞いて会いにきたんだ。

ドン・ルイス そのありがたい気持ち、ドン・ファンともども諸兄におおいに感謝するよ。

ドン・ファン さつさとはじめようじゃないか、ドン・ルイス。(他の人物たちに) 椅子を寄せてくれ。(遠くの人々に) みなさん、みなさんも勝負を見物にいらしたんでしょう。わたしはかまいませんので、どうかご遠慮なく。

ドン・ルイス おれもかまわない。きみとのさしの勝負、天地神明に誓っておれは負けなかったと、そう誓って胸を張れる。

ドン・ファン それはこつちも同じ。おれが嘘つきじゃないのは世間周知だ。なにしろどこへいつても騒動を起こしたからな。

ドン・ルイス (ドン・ディーエゴとドン・ゴンサロに) どうです? そのお二方、話が遠いんじゃないやありませんか? ねえ、あなた方。

ドン・ディエーゴ わたしはだいじょうぶだ。

ドン・ルイス そちらの方は？

ドン・ゴンサロ わたしもここでよく聞こえる。

ドン・ルイス かまわないんだろうな、いいというんだから。

(一同、ドン・ルイス・メヒアとドン・ファン・テノリオのテーブルの周りに椅子を寄せて座る。)

ドン・ファン はじめていいか？

ドン・ルイス ああ。

ドン・ファン おたがい、らしからぬふるまいをせず、ちゃんと約束を守ったな。

ドン・ルイス じゃあ武勇伝を報告しあおう。

ドン・ファン そのまえに一杯ひっかけようじゃないか。

ドン・ルイス そうだな。(二人、飲む。)

ドン・ファン この勝負は……。

ドン・ルイス つまり、ある日おれが豪語したというわけだ、スペイン広しといえどルイス・メヒアがやつてのけるはずのことをやる人間は、どこにもあるまいと。

ドン・ファン しておれは同意できずにいった、ドン・ファン・テノリオがやつてのけるはずのことこそ、だれも真似できまいと。そうじゃなかったかな？

ドン・ルイス そのとおりだ。そこで向こう一年、二人のうちどっちが悪比べで勝ち運に恵まれるか賭けることにした。そして今日ここで会って勝負しよう。

ドン・ファン で、おれはここへきた。

ドン・ルイス おれもだ。

センチリヤス まったく前代未聞の勝負だ！

ドン・ファン　じゃあ何うとしようか。

ドン・ルイス　いや、そつちからはじめてくれ。

ドン・ファン　きみのいいようにしよう。どつちだつて同じ。それにおれは人を待たせない主義だ。——さてと、きみ、おれは手柄を立てるべく広い世界を求め、ここからイタリアへ渡つた。なにしろあそこは逸楽の殿堂、愛と戦いの古い歴史と伝統の地。そして皇帝陛下が当のイタリアそしてフランス相手にいくさをしておいでの場所でもある。おれは自問自答したんだ、「どこがいちばんいい？　兵隊のいるところ博打に喧嘩に色恋ありだ」というわけで迷わずイタリアを選んだ、色と喧嘩の相手探しに血をたぎらせてね。ローマに着いたあととよきみとの勝負に邁進しようと、宿の扉にこういふ張り紙をして恋と喧嘩の誘いをかけた、「当所にドン・ファン・テノリオ止宿す。かれになにごとかを求むる人きたれ」。ローマでの話ははしよるよ。現地に残した評判を聞いてみくれ。それがどんな評判かは張り紙の文句で察しがつくだらう。土地柄は淫風に満ち女は多情、対するおれは伊達男の放蕩者ときてる。色恋沙汰は数えきれないほどだつたよ。で、お察しのとおりしまいには都落ち、めいっばいきたないなり、をして正体を隠し、ひどい馬にまたがつて。なにしろ縛り首にされそうだつたからね。それからスペイン軍に加わつた。異国の空の下みんな同胞、それに兵隊仲間でもあつたが、五、六回決闘をやつて、すぐに軍団におさらばする運びと相なつた。

次にいつたナポリは恋の花咲きほこる花園、逸楽の都市、ここでもまた張り紙をした。「当所にドン・ファン・テノリオ止宿す。男にしてかれに敵する者なし。女にしてかれの的とならぬ者なし、上は高貴なる姫君から下はぼろ舟にて漁る賤の女に至るまで。金貨もしくは武勇の勝負であれば、いつなんどきなりと受けて立たん。決闘を好む者、かれを探し求めよ。博打を好む者、かれのもとへきたれ。われこそはと思ふ人、立ちはだかるべし。博打に決闘あるいは色恋にてかれにまさる人、さてありや」と、こう書いてね。ナポリにいること半年、なにかただならぬ出来事、騒動、たぶらかしがあれば、かならずおれが噛んでいる。ゆく先々で道理を踏みにじり、徳を嘲り、正義に背き、女をたぶらかした。あばら家へくだり、宮殿へ登り、修道院の塀を越え、きまつてどこで

も無念の思いを人の心に残した。おれの辞書に「神聖」という言葉は存在せず、時と場所を選ばず度胸一番なんでもやった。相手がだれであれ少しもかまわず、挑みたいやつに挑み、かかってくるやつと戦ったが、一度も心配なんかしなかったよ、こつちが殺られるなんて。それどころかいつも反対に殺してやった。これがドン・ファンの武勇伝。やってのけたことのいちいちには、ここにこうして書いてある。書かれた中身については、このドン・ファンが生き証人だ。

ドン・ルイス じゃあ読みあげてみてくれ。

ドン・ファン いや、その前にきみのほうの赫々たる手柄の話聞かせてもらおうじゃないか。そのうえでそれが疑う余地のない確かな話であれば、たがいの書いた中身を比べてみよう。

ドン・ルイス なるほど。もっともしごくだな、ドン・ファン。とはいえ、どうやら二人の武勇伝は大差ないよ。うだがね。

ドン・ファン ならば聞かせてもらおうか。

ドン・ルイス おれの話はこうだ。きみと同じで、元氣横溢、なにか大きなことをと考えをめぐらすうち、はたと膝を打った。「そうだ！ 恋と喧嘩を探すにはフランドルへいくにかぎる。あそこじゃいくさが始まっている。ということは、おれの望みどおり喧嘩と女遊びの機会が百倍二百倍つてわけだ」。で、フランドルへいったままで、はよかつたものの、これがついてない。向こうでひと月過ぎすうち、一枚また一枚と金貨が羽を生やして飛んでいって、あげくのはてにすつからかん。無一文になったと見るや周りから人が消えちまった。そこで仲間を探して盗賊一味に加わった。この稼業はうまくいったよ、いやじつに！ ついてたのなんの、まさに順風満帆、ヘントじゃなんと司教の館へ押し入った。あれはすごい夜だったなあ。敬虔なる司教様は復活祭を祝う儀式を司りにお出かけだった。あのととき目にした財宝を思い出すと、いまだに胸がわくわくして体が震えてくるよ。それがそつくりおれたちのものさ。ところが首領が欲張りなやつで、おれの分け前を横取りしやがった。そこで喧嘩になつたが腕はこつちが上。容赦なくぐざりと刺してやったよ。おれの強いのを見た子分どもから、すぐさま首領

に祭りあげられ、おれのほうでもかわいがつてやる、分け前をたつぷりやると約束してやった。ところが次の晩には全部ひつかついでどろん。なに、「盗びとより奪わば百年の赦し」つてことわざを思い出してね。それで救いを得ようと、あえてこんな背信行為におよんだわけさ。

というしだいでドイツへ高飛び。懐には金がうなつてた。だがヒエロニムス修道会の管区長の坊主で、やけに鋭いのがいて、こいつがおれの正体を見抜くなり匿名の手紙を書いて通報しやがった。ところがどっこい、金の力にものをいわせて自由を買いとつた。ついでにその手紙も。で、そのあとその坊主と道でばったり出くわしたとき、弾をその紙で包んでズドンと一発くらわしてやったが、狙いたがわず命中したよ。

お次はフランス。いい国だつたなあ！ きみがナポリでやったみたいにパリで張り紙をした。こういうやつだ。「当所にドン・ルイスなる者あり。二人力、三人力の者なり。当地に数か月留まる所存。わが願いはひとつにして欲するは他になし。すなわちフランスの婦人に熱き愛をば捧げ、フランスの男おのこと仕合うことなり」と、こう書いて半年間パリを楽しませてやった。なにか尋常でない出来事や騒動があつたり、死人、怪我人が出たらばそこにはかならずおれがいる。だが、きみに做つていたら話すのはよそう。張り紙をしたあと、かの地に残した赫々たる手柄の評判がわが誉れの証人だ。おれもきみ同様、ゆく先々で道理を踏みじり、徳を嘲り、正義に背き、女をたぶらかした。そのあいだに三度ばかり無一文になつたが、いつもなんとかなる自信があつたし、今度だつてドニャ・アナ・デ・パントハとの結婚が控えてる。これはかなり財産のある令嬢でね、話ができていて、あした式を挙げる段取りになつてゐるんだ。こういうのも、ドン・ファン、きみが式に参列してくれないかと思つてね。これがドン・ルイスの行状。挙げた手柄のいちいちはこの紙に書いてある。その中味についてはこのドン・ルイスの折り紙つきだ。

ドン・ファン 武勇伝は似通つていて甲乙つけがたいな。じゃあ肝心な点にゆこう。紙に書かれた手柄の数だ。それを聞かせてもらおうか。

ドン・ルイス なるほど、ごもつとも。おれのはこれのとおりだ。見てくれ。見やすいよう線を一本引いて名

前を書き分けてある。

ドン・ファン おれのもやつぱり整理して書いてある、決闘で斃した相手とたぶらかした女、二つに分けて。数えてみてくれ。

ドン・ルイス きみも数えてみてくれ。

ドン・ファン 二十三人。

ドン・ルイス それだけあの世へ送った。きみのほうはどうか。おい、ほんとうか!? 全部で三十二人も!

ドン・ファン それだけあの世へ送った。

ドン・ルイス よくぞ殺^やったもんだな。

ドン・ファン おれのほうが九人多い。

ドン・ルイス きみの勝ちだ。今度はものにした女の数だ。

ドン・ファン これによると五十六人。

ドン・ルイス きみか書いてるのは全部で七十二人。

ドン・ファン じゃあそつちの負けだ。

ドン・ルイス 信じられない数だな、おい!

ドン・ファン お疑いならそこに証人の名前も書いてあるから、連中に訊いてみてくれ。証言してくれるだろう。

ドン・ルイス まさか! きみの書いたものに嘘のあるはずがない。

ドン・ファン 王女様から漁師の娘まで、いやあ、身分を問わずくまなく愛の遍歴をしたなあ! なにかけちをつ

けるところがあるかね?

ドン・ルイス 厳密に言えば一種類だけ欠けてる。

ドン・ファン それがなにかご教示願えるかな?

ドン・ルイス それはきみ、修道女志願の娘だよ、修道誓願する前の。

ドン・ファン なあんだ！ だったら倍楽しませてやるよ。約束しよう、修道女志願の娘に加え、結婚を控えた友人の婚約者ものにしてみせる。

ドン・ルイス はっ！ いうじゃないか。

ドン・ファン なんなら賭けるか？

ドン・ルイス よし、受けて立とう。きみが降参するまでに二十日ぐらいあればいいか？

ドン・ファン 六日で十分だ。

ドン・ルイス まったくとんでもないやつだな！ いいと思った女は、いったい何日ぐらいものにするんだ？

ドン・ファン そこらで出会う女の数で一年三百六十五日を割ってみる。口説くのに一日、ものにするのに一日、捨てるのに一日、代わりを見つけるのに二日、忘れるのに一時間。だが実をいうとあんまり悠長に構えてもいけない。なにしろきみの結婚はあしたで、おれは当日ドニャ・アナ・デ・パントハをきみから奪う気ではないからな。

ドン・ルイス おい、どういう意味だ？

ドン・ファン ああ、お聞きのとおりさ。

ドン・ルイス なにをしようとしてるかわかってるんだらうな、ドン・ファン？

ドン・ファン かたづけらるべきとき、ドン・ルイス。

ドン・ルイス ガストン！（と、呼ぶ。）

ガストン なにか？

ドン・ルイス ちよつと。

（ドン・ルイスはガストンに耳打ちする。ガストン、足早に立ち去る。）

ドン・ファン チウッティ！（と、呼ぶ。）

チウッティ なにか？

ドン・ファン ちよつと。

(ドン・ファンはチウツテイに耳打ちする。チウツテイ、足早に立ち去る。)

ドン・ルイス 二言はないな？

ドン・ファン ああ。

ドン・ルイス 命が懸かっているぞ。

ドン・ファン 望むところだ。

(ドン・ゴンサロはこのときまでじつと座っていたが、椅子から立ちあがってドン・ファン、ドン・ルイスと向きあう。)

ドン・ゴンサロ 馬鹿者どもめ！ ええい、手さえ震えておらねば、二人とも犬畜生同然に棒で打ち殺してくれるところだ！

ドン・ファン、ドン・ルイス やってやろうじゃないか。

ドン・ゴンサロ それはごめんこうむる。いい歳をして張れぬ虚勢は張らん。

ドン・ファン だつたら消え失せる。

ドン・ゴンサロ ドン・ファン、わしの声の届かんところへいってしまふまえに、ひとついっておかねばならん。

聴くがいい。きみの厳父ドン・デイエーゴは、万事がついたので結婚の約束をなさり、ちかぢか挙式の運びとなつておつた。だがその前に、わしはこの目できみの人物を見ようと日暮れ時分にここへきたのだが、見ていて恥ずかしかった。

ドン・ファン 黙れ、もうろくじじい！ われながら感心するぐらいだ、よくぞ手を出さずに黙って聴いていたとな。さあ、とつとと名乗れ。さもないと魂といつしよにその仮面をひつpegがしてやるぞ。

ドン・ゴンサロ ドン・ファン！

ドン・ファン さあ！

ドン・ゴンサロ ならば見ろ。

ドン・ファン ドン・ゴンサロ！

ドン・ゴンサロ ああ、わしだ。では失礼するぞ、ドン・ファン。そして今日を限りにドニャ・イネースのことは忘れるがいい。だれがきみなどに娘をやるものか。それぐらいならこの手であれの墓穴を掘つてやる。ああ、そうしてやるとも！

ドン・ファン ドン・ゴンサロ、それは笑止千万。わたしに挑もうとなさつても、しよせん蟻螂の斧。まだ時間がありますので、わたしからご警告申しておきましょう、お嬢様をくださればよし、さもなければ、これはもうそちらの手から奪いにゆくことになります。

ドン・ゴンサロ 度しがたい男だな、きみは！

ドン・ファン 申すべきことは申しました。お嬢様のような立場の方が勝負の中にはいつていなかった、だからこうして入れた、それだけの話です。

(ドン・ディエーゴはこれまで仮面を着けて椅子に座っていたが、立ちあがつて舞台中央へ進み出てドン・ファンと向きあう。)

ドン・ディエーゴ もう聞くにたえん、ドン・ファン、恥ずかしいやつめ。おまえを滅ぼす雷が天上で用意されておらねばいいがな。ああ……！ 耳に届いておつた噂に納得がゆかず、嘘と信じて今晚おまえの様子を見にきた。だが誓つていうぞ、悪^{わる}め、わしは足を運んだのを後悔しておる。知るべきでなかったことを確信して帰らねばならんとは……。このうえは愚かな血気にはやり、やみくもに進みつづけるがいい。だが、二度とわしの前に顔を出してくれるな。もはやおまえは見知らぬ男だ、ドン・ファン。

ドン・ファン おれが一度でもあんたの前に顔を出したかね？ 偉そうな口を利くじゃないか。あんたにとつておれが見知らぬ男であろうとなかろうと、それがなんだというんだ。

ドン・ディエーゴ では、これまでだ。だが忘れるな。天罰覲面だぞ。

ドン・ファン おい。(と、引きとめる。)

ドン・ディエーゴ なんだ。

ドン・ファン 顔を見せろ。

ドン・ディエーゴ 断わる。おまえの頼みなど聞かん。

ドン・ファン 断わるだと？

ドン・ディエーゴ そうだ。

ドン・ファン だがおれは見たいとなつたら……。

ドン・ディエーゴ どうする？

ドン・ファン こうだ。(仮面を剥ぎとる。)

全員 ドン・ファン！

ドン・ディエーゴ なにをする！ よくもわしの顔に手をかけたな！

ドン・ファン これは……父上！

ドン・ディエーゴ 黙れ。わしに息子などおらん！

ドン・ファン 怒らないでください、どうか！

ドン・ディエーゴ 黙れ！ おまえのような者を悪魔の申し子というのだ！ お代官、会わなかったことにしましよう。

ドン・ゴンサロ わたしはとつくにそうしています。さあ、ゆきましよう。

ドン・ディエーゴ ええ、出ましよう。ここでこんな醜悪な男を見ていたくない。——ドン・ファン、おまえを悪徳の腕の中に捨ててゆくことにする。頭を抱えておるがいい。おまえはわしの命を縮める……が、最後の審判のときがくれば赦してやろう。

(ドン・ディエーゴとドン・ゴンサロ、おもむろに退場。)

ドン・ファン　これはまたずいぶん気の長い話ですね。でも、いいですか、お断わりしておきますが、ぼくのほうからそちらへ出向いて、赦してくださいなんてお願いした覚えはありませんよ。だから以後ぼくのごことで気苦労なさる必要はありません、どうぞドン・ファンはこれからも、これまで通りの流儀ですつと生きてゆくんですから。

第十三場

ドン・ファン、ドン・ルイス、センチリヤス、アベリヤネダ、ブッタレツリ、やじ馬、
仮面の人々

ドン・ファン　よし、切り抜けた！　説教を食らってもうろたえる必要はない。親子のあいだじゃ日常茶飯事、いつも馬耳東風を決め込んできた。ということできつきの話だが、ドン・ルイス、ドニャ・アナとドニャ・イネー
スの賭けは成立したからな。

ドン・ルイス　賭けるのは命だぞ。

ドン・ファン　そういう話だったな。出ようか。

ドン・ルイス　ああ。

(出ようとしたところで警吏の一隊があらわれ、二人を制止する。)

第十四場

前の場の人々と警吏の一隊

警吏 待て。ドン・ファン・テノリオというのは？

ドン・ファン おれだ。

警吏 逮捕する。

ドン・ファン なんの話だ！ 理由はなんだ？

警吏 いずれわかる。

ドン・ルイス (ドン・ファンのほうへ歩み寄り、笑いながら) テノリオ君、そう驚きたまうな。おれの従者が賭けのことを考え、きみの勝ちになってはたいへんと密告したのさ。

ドン・ファン 驚いたな！ きみがそんな策士だとは意外だったね、いや、まったく！

ドン・ルイス では、いつてきたまえ。今度ばかりは、おい、おれの勝ちってわけだな。

ドン・ファン じゃあ、ゆこうか。

(出ようとしたところで別の警吏の一隊が登場し、彼らを止める。)

第十五場

前の場の人々と警吏の一隊

警吏 (登場して) 待て。ドン・ルイス・メヒーアか？

ドン・ルイス そうだが……。

警吏 逮捕する。

ドン・ルイス なんの話だ！ 逮捕だと？

ドン・ファン (大笑いする) わつはつはつは！ メヒーア君、そう驚きたまうな。おれの従者が賭けのことを考え、きみにじゃまされてはたいへんと密告したのさ。

ドン・ルイス きみを道連れにして死ぬんなら満足だ。

ドン・ファン ゆこうか。じゃあ諸君、まだ勝負はつづいていっているということだ。

(警吏はドン・ファンとドン・ルイスを連行する。人がぞろぞろついてゆく。センチリヤス大尉、アベリヤネダ、および彼らの友人ら；は残つて、たがいに顔を見合わせる。)

十六場

センチリヤス大尉、アベリヤネダ、やじ馬

アベリヤネダ 嘘みたいな賭けだな！

センチリヤス 目の前で見てなきや信じられないだろうな。

アベリヤネダ よし、おれはメヒーアに賭ける。

センチリヤス おれはテノリオだ。

第二幕

早わざ

街角から見たドニヤ・アナの屋敷の外側。角を作る壁が左右に等しい長さで伸びている。右の壁には格子窓、左の壁には格子窓と出入り口。

第一場

ドン・ルイス・メヒーア（顔を隠している。）

ドニヤ・アナの屋敷の前に着いた。今晚セビーリヤでなにが起こるか知らせておかなければ。さいわいだれにも出くわさなかったが……。くそ、心配でしかたがない！ もっとも今度は、ドン・ファン殿よ、おたがい持つて生まれた運しだいつてところだな。仮にこれが名と命を賭けた勝負なら、その二つを守るためおれの腕と度胸がものをいって……。待て。だれかくる。

第二場

ドン・ルイス、バスクアル

バスクアル　こんなこと信じられるか!? まったくなんてことだ、二人とも捕まるなんて！

ドン・ルイス まさか！ あれはパスカルか？

パスカル 脳みそが破裂しそうだ。

ドン・ルイス パスカルか？

パスカル だれだ、いきなり？

ドン・ルイス おれだ、ドン・ルイスだ。

パスカル こりゃたまげた！

ドン・ルイス なにを驚く？

パスカル 旦那様でしたので。

ドン・ルイス おれの運の強さは、パスカル、こういうところだ。もしおれがこんなでなく、今ここでおまえと出くわさなければ、今晚おれの花嫁のドニャ・アナの操が穢されるところだった。

パスカル それはまたどういうことで？

ドン・ルイス ドン・ファン・テノリオを知っているな？

パスカル それはもう。この都市まちであの方を知らない者はごいません。でも巷の噂じゃ旦那様ともども逮捕された。くそつ、下種どもの与太話か。

ドン・ルイス それが今度ばかりは巷の噂は事実だったんだ。誓っていうが、王室財務官のおれのいとこが身元引受人になつてくれなかつたら、パスカル、なによりだいな宝をなくすところだった。

パスカル どうしてでございますか？

ドン・ルイス 味方になつてくれるか？

パスカル 目の黒いあいだは。

ドン・ルイス じゃあ聴いてくれ。おれとドン・ファンは命を懸けた勝負をはじめたんだが、手助けしてくれたらおまえはおれにとって命の恩人以上だ。

パスカル で、どうすればよろしいので？ おいいつけくださいまし。

ドン・ルイス 一年前おれたちほとんどでもないむちゃをはじめた。二人のうちどっちが最高の運に恵まれ、最低の悪事を重ねられるかという賭けだ。二人はたがい度胸勝負。だがあいつは人間じゃない。結局あいつの勝ちになった。で、おれがなんだかんだけちをつけたんだ。するとそれについてあれこれやりとりがあつて、しまいにあいつはおれを見くだして小ばかにするようにいった、「これで足りないというなら、賭けよう、きみが式を挙げる予定のドニャ・アナを、あした奪いとつてみせる」とな。

パスカル それはまた……！ よくもそんなことをぬけぬけと？

ドン・ルイス いうだけならまだいいんだが、パスカル、あれは思惑どおりやつてのけるやつだ。

パスカル やりとげると？ わたくしがここにでんと控えているかぎり、ご心配にはおよびません、ドン・ルイス様。

ドン・ルイス この勝負に負けたら、ほんとにおれはどうなってしまうのか。

パスカル なにおつしゃいます！ あの方を恐れておいでなので？

ドン・ルイス いや、断じてそれはない。だが、あの男はなじみの悪魔を連れているやつだからな。

パスカル だいじょうぶでございますよ。

ドン・ルイス ああもう心配で心配で、さっぱり自信がない！ なにしろ相手はあんな大胆な男だ。

パスカル 天地神明に誓つて、いくら相手が大胆だろうとアラゴン男児たる者、死んでも好き勝手させるものではございません。まあ見ていてくださいまし。

ドン・ルイス いや、パスカル、おまえはなんに首を突つ込もうとしてるかわかつてないんだ。

パスカル わたくしはこれどころではないはめに陥つて、無事切り抜けたこともございます。

ドン・ルイス 一刻の猶予もないうえ、相手が相手だからなあ。

パスカル このアラゴンの男一匹、テノリオ様なんかには負けはしません。あんな大口叩きの喧嘩屋は、どれも

ただの見かけ倒しで中身は弱虫。口は女をたぶらかす道具、手はおいばれ相手に強がるか、物売りを小突きまわす道具でしかない。けれど達人に切れ味鋭い剣を振るわれ、命をとるぞと脅されようものなら、いつもの威勢はどこへやら。ああしようしようとうと目論んで大騒ぎしても、とどのつまりは相手の娘の悪口いったり、夜警を見て尻に帆かけて逃げるのが落ち。

ドン・ルイス パスカル！

パスカル 旦那様の話ではございません。そりゃあ旦那様は遊び人ですが、性根が座っていて喧嘩もお強い。憎いお人でございます！

ドン・ルイス おれが肝の太さで名が知れわたっているにしても、なあパスカル、テノリオ一族の肝つ玉だつてずいぶん有名だぞ。おれはあいつがどれだけすごいのか、嫌というぐらい見てきた。だからあいつにまんまとしてやられ、おれの名が地に落ちるんじゃないかと心配してるんだ。

パスカル そうはおっしゃってもドン・ルイス様、もう娑婆へ出ておいでではございませんか。そんなにお嬢様のことがご心配なら、悪だくみの裏をかいてやればいいだけ。あの方がなにをされるとお思いで？

ドン・ルイス それはわからないが、今晚なにかやつてのける腹じゃないかと睨んでるんだ。

パスカル まさか。

ドン・ルイス なぜ？

パスカル 捕まっておいでなのでは……？

ドン・ルイス それはそうだが、おれだつて捕まっていたじゃないか。しかるべき人物が身元引受人になつてくれたんだ。

パスカル けどあの旦那様の場合、どなたがそれをなさいますので？

ドン・ルイス とどのつまり、おれが安心できるやり方はひとつしかない。

パスカル それはまたどんな？

ドン・ルイス おれが今晚この屋敷で過ごすんだ、パスカル。

パスカル でも、それではドニャ・アナ様の操を犠牲にすることになります。

ドン・ルイス 馬鹿をいえ！ おれはあした花婿になる身じゃないのか？

パスカル でも旦那様、わたくしが命に代えてもお助けいたしますと、そう申しあげたはずでは……？

ドン・ルイス ああ。しかし手荒に出てくる場合は心配ないだろうが、策を弄されるとなるとそうはいかない。ということはつまり屋敷でひと晩過ごすか、夜警に見とがめられる覚悟で外で見張るかなんだよ。

パスカル ドン・ルイス様、またずいぶん頑固でいらつしやいますねえ。悪いことは申しません、そんなとつぴな考えはお捨てになったほうがいい、きつと大事ございませんから。

ドン・ルイス いや、そうはいかない。

パスカル ドン・ルイス様！

ドン・ルイス この話はこれまでだ。

パスカル まいりました。そんなに心配でたまらないと？

ドン・ルイス なんとでもいえ。だがおれはドン・ファン云々のまえに、まず女というやつがまるで信用ならないんだ。この破天荒な勝負をはじめたのは二人の横紙破り。だったら無法者の横紙破りと対抗するには、後先考えない横紙破りがふさわしいだろう。

パスカル その言葉はいかがかと……、だつてわたくしはドニャ・アナ様がおぎゃあとお生まれになったときから、お仕え申しているのですよ。それにドン・ルイス様、あなた様はあしたその花婿になるお方はございませんか。

ドン・ルイス パスカル、そのときがきてしかるべき権利を得たら、おれはよき夫となつて、妻を幸せにしてやるつもりだ。だがそれまでは……。

パスカル もうなにもおっしゃいますな。お二人のことは小さい時分から見えてまいりましたし、仲睦まじさも

存じております。ええ、それはもう！では、こういたしましょう。わたくしの部屋は二人いてもまだたっぷり余裕がございますので、そこにいらしてくださいまし。でもお約束を、そのあいだはどうかお静かに。

ドン・ルイス よし、わかった。

パスクアル ではあしたになるまでごいっしょして、四つの目を開いて寝ずの番をいたしましょう。

ドン・ルイス これでドニヤ・アナはだいじょうぶだな。

パスクアル はい。

ドン・ルイス じゃあゆこうか。

パスクアル お待ちください。なにをなさいますので？

ドン・ルイス 中へはいるんだ。

パスクアル もうでございますか？

ドン・ルイス あいつのことだ、なにをするかわかったもんじゃない。

パスクアル いつしと思えばこそのご心配でございますが、ご辛抱を。旦那様のヒル・デ・パント八様が

お休みになり、お屋敷じゅうが静かにならないうちはどうにもなりません。

ドン・ルイス くそっ……！

パスクアル 旦那様、たまにはいつし気持ちを少し抑えてくださいまし。

ドン・ルイス だったらそのありがたいご主人様は、いつも何時ごろ床におはいりになるんだ？

パスクアル 十時ごろ。その狭い路地に面して格子窓がございますので、十時になったらお呼びくださいまし。

それまではこちらにお任せを。

ドン・ルイス よし、わかった。

パスクアル ではドン・ルイス様、のちほど。

ドン・ルイス ああ、パスクアル、またあとでな。

第三場

ドン・ルイス

こんなに心配になったのははじめてだ。今夜はなんだかおれにとって大凶の時のような気が……。いわくいい
難い漠然とした不安。胸騒ぎがする。なにかとんでもないなりゆきになるんじゃないかと恐ろしい。ああ、ほん
とに、こんなにまでドニャ・アナがいとしくなるとは思ってもみなかった！ ドニャ・アナに対するほどの気持
ち、どんな女にも感じたことはない……。ああ！ ドン・ファンの剣の腕など怖くはないが、正直、やつ^の運
の強さばかりは恐ろしい。なにをするにつけ、いつも悪魔に守られているようだ。いや、そうじゃない。あいつ
自身が地獄からきた男。パスカルはあいつが、おれがここを離れたらしてやられるにちがいない。愚か者
と嗤^わわれようが中へはいつていよう。相手がドン・ファンとなれば油断大敵だ。(窓を叩く。)

第四場

ドン・ルイス、ドニャ・アナ

ドニャ・アナ どなた？

ドン・ルイス パスカルじゃないのか？

ドニャ・アナ ドン・ルイス！

ドン・ルイス ドニャ・アナ！

ドニャ・アナ どうしてこんな時間に窓辺で呼ぶの？

ドン・ルイス ああドニヤ・アナ、ほんとにいいときに出てきてくれた！

ドニヤ・アナ いったいどうしたの、メヒーア？

ドン・ルイス ある男と美しいきみのことで賭けたんだ。そいつはぼくには恐ろしいやつで……。

ドニヤ・アナ どうしてその方を恐れるの、わたしの心はあなたのものなの？

ドン・ルイス ドニヤ・アナ、きみにはわからないだよ、あの男の名前を知らない、運の強さも知らないから。

ドニヤ・アナ いくら運が強かろうと、わたしにはなんの意味もないわ。だって、ほら、あと何時間もしないうちに結婚式。あなたは杞憂にとり憑かれているだけ。

ドン・ルイス 天も照覧、手もとに剣があつて、やつがきみの面前にあらわれるんだったら、なにも恐れはしない。ところがやつときたらライオンみたいに大胆、狡猾な蛇のように用心深くて賢くて……。

ドニヤ・アナ ばかばかしい！ いいから安心してお休みなさい。大胆だろうが賢かろうが、わたしからはなにも得られない。だってわたしの幸せはあなたあつてこそですもの。

ドン・ルイス ならばアナ、きみがぼくを愛しているというんだったら、その証しに頼みをひとつ聞いてくれな
いか。そうしてくれればあの男を恐れずに済むから。

ドニヤ・アナ なに？ でももつと小さな声でね、壁に耳ありだから。

ドン・ルイス よし、じゃあ……。

第五場

ドニヤ・アナ、ドン・ルイス(右の壁の格子窓)、ドン・ファン、チウツティ(左の通り)

チウツティ 旦那様、いやほんと、あなた様はよくよく運の強いお方でございますねえ。

ドン・ファン ああ、おれほどの者はいないな。見てのとおりだ、あの一筋縄ではいかない牢番殿がわけなく籠絡されておれを出した。だがこの話はもういい。頼んだことはやってくれたか？

チウツティ 万事抜かりございません。思ったよりうまくいきました。

ドン・ファン あの聖女様はちゃんと……？

チウツティ これが庭の戸の鍵。けど、どのみちよじ登らなきゃいけないかと。ご存じでしょうが、あの修道院の扉はどこにも戸がありませんので。

ドン・ファン 手紙は渡されたか？

チウツティ いえ、なにも。けど、すぐにちよつと出てきて旦那様と話し、また中へ引っ込むとおっしゃいました。

ドン・ファン 上々だ。

チウツティ さようで。

ドン・ファン それで馬は？

チウツティ 鞍と手綱を着けて、もう用意してございます。

ドン・ファン 人間は揃っているか？

チウツティ 近くに控えております。

ドン・ファン よし、チウツティ。おれが牢屋にいると思って、セビーリヤじゅうが高枕で寝ているすぎに、おれの高い名簿にまた名前を二つ足してやるぞ。は、は、は！

チウツティ 旦那様。

ドン・ファン なんだ？

チウツティ お静かに。

ドン・ファン どうした、おい？

チウツティ 角を曲がったところにあるその格子窓の前に、男が一人立っております。

ドン・ファン なるほど。いや、となるとこれは勝負には好都合だ。確かにやつだらうな？

チウツティ だれだと？

ドン・ファン ドン・ルイスだ。

チウツティ ご冗談を。

ドン・ファン なにをいつてる！ おれだつて出てきてるじゃないか。

チウツティ 旦那様とあの方とは違います。

ドン・ファン 論より証拠だ、チウツティ。あそこに女の姿が見える。格子窓の向こうだ。

チウツティ たぶん下女でございましょう。

ドン・ファン これはもう確かめるべきだな。もしも勝負に負けたら名折れだ。おいチウツティ、仲間のうちから何人が連れて、夜警のふりをしてあの道を通つて屋敷の周りをひとまわりしてきてくれ。

チウツティ そんなことをしたら窓を閉めちまいませんか？

ドン・ファン そうなれば女に知られずにやつを捕まえられて、かえつて好都合だ。

チウツティ そいつは道理だ。

ドン・ファン 急げ。逃げ道をふさぐんだ。勝負がかかつてるぞ。

チウツティ けど、あのベテン師の旦那が向かつてきたら？

ドン・ファン そのときはばつさりやつてしまえ。

第六場

ドン・ファン、ドニャ・アナ、ドン・ルイス

ドン・ルイス じゃあ承知してくれるんだね？

ドニャ・アナ ええ。

ドン・ルイス そうやって喜ばせてくれるんだね？

ドニャ・アナ いろんなことだろうと。

ドン・ルイス じゃあ、あしたまできみの番をさせてもらうよ。

ドニャ・アナ ええ、メヒーア。

ドン・ルイス ありがとう、いいしいアナ、よろこんで聞いてくれて。

ドニャ・アナ あなたのいうことはなんでも聞いて、わたしの真心を信じてもらえるようにするわ、メヒーア。

ドン・ルイス じゃあまたあとでくるからね。

ドニャ・アナ わかったわ。十時ね？

ドン・ルイス 待っていてくれるか、アナ？

ドニャ・アナ ええ。

ドン・ルイス ここだよ。

ドニャ・アナ ちゃんと時間どおりきてくれるんでしょう？

ドン・ルイス ああ。

ドニャ・アナ じゃあ鍵を渡しておくわ。

ドン・ルイス こうしてぼくはきみの屋敷の中。テノリオのやつ、くるならこい。

ドニャ・アナ だれかくる。じゃあ十時に。
ドン・ルイス ここにくるよ。

第七場

ドン・ファン、ドン・ルイス

ドン・ルイス 待て。こつちへくるやつがいる。——だれだ、そこをやってくるのは？
ドン・ファン やつてきている者だ。

ドン・ルイス そうやつてやつてきている者とはいかなる者だ？

ドン・ファン 望んでいる者だ。

ドン・ルイス おれに舌を引き抜かれるかどうか知りたいとか？

ドン・ファン ここは天下の往来だ。

ドン・ルイス 守る番人がいる。

ドン・ファン おれが五体満足じゃないとでも？

ドン・ルイス 丁寧をお願いしたらどうだ？

ドン・ファン どなた様だ？

ドン・ルイス ドン・ルイス・メヒア様だ。

ドン・ファン 道をゆく者はじゃまをされたくない。

ドン・ルイス おれを知っているか？

ドン・ファン 知っている。

ドン・ルイス おれはそっちを？

ドン・ファン たがいに知る仲だ。

ドン・ルイス で、なにゆえじゃまをする？

ドン・ファン 道ゆえだ。

ドン・ルイス 道でゆきあつたせいか？

ドン・ファン そうだ。

ドン・ルイス 今この道を通る用のある人間は二人しかない。

ドン・ファン 承知している。

ドン・ルイス きみはドン・ファンか！

ドン・ファン ほう、二人とも娑婆に出ているというわけか！

ドン・ルイス きみは捕まったんじゃないのか？

ドン・ファン ご同様に。

ドン・ルイス こいつは驚いた！じゃあ脱け出したのか？

ドン・ファン きみに做つてな。で、それがどうした？

ドン・ルイス 勝負はそっちの負けになるぞ。

ドン・ファン どうかな。

ドン・ルイス まあ見てるがいい。

ドン・ファン おれたち二人で彼女を包囲している格好だが、その実きみは袋の鼠。

ドン・ルイス まだ時間はある。

ドン・ファン そっちが負けるだけのな。

ドン・ルイス なにつ、思い知らせてやるぞ！

(ドン・ルイスは剣を抜くが、そつと近づいて背後に控えていたチウツティ一味に抑えられる。)

ドン・ファン ドン・ルイス殿、だから申しあげたではないか。

ドン・ルイス 卑怯だぞ。

ドン・ファン 口を……。

(といわれ、一味はドン・ルイスの口をふさぐ。)

ドン・ルイス うっ！

ドン・ファン 後ろ手にねじりあげろ。(一味が腕を抑える。)もつと強く。メヒア殿、勝負あつたようですな。

(二味に) あしたまで閉じ込めておけ。これでこつちのもんだ。(ドン・ルイスに) じゃあな、ドン・ルイス。勝つ

たのは騙し討ちのおかげ。だがおれ流にやつたまでだ。

